

第9章 労働の価値

第1章 利潤は商品を価値通りに売ることによって得られる

司会…9章と10章を担当してくれるのは、林野労組の若き活動家である高知県協の越智洋さんです。まず9章のレポートを行って討論をしましょう。よろしくお願いします。

第9章 労働の価値

労働の価値とは

「労働力の価値」の通俗語

労働の価値とは、労働力の維持に必要な諸商品の価値によって測定された労働力の価値に他ありません。つまり、

労働者とその家族が生きていく上で必要な諸商品の総額です。

しかし、その労働力の対価は労働者の労働が遂行された後で支払われるため、労働者は労働力の価値を働いた12時間分だと思ってしまうのです。

実際は半分の6時間で労働者の労働力の価値は実現されており、残りの6時間は剰余価値となります。そのため、次の二重の結果が生ずるのです。

①労働力の価値または価格は、労働者そのものの価格または価値たる外観をおびる。つまり、実際は労働力の価値であるが、労働の価値のように見える。

②労働者の一日の労働の一部分だけが支払われて他の部分はいらないのであるのに、またその不払いまたは剰余労働こそまさに剰余価値または利潤の構成元本であるのに、あたかも総労働が支払労働であるかに見える。

奴隷と農奴と労働者

この間違った外観が、今までの歴史的な労働形態と区別され、大きく違うところですか。どういうことなのでしょう。

例として奴隷と隷農（農奴）の話が



レポーターの越智洋さん

書かれています。「奴隷は生きるために必要最低限の生活資料は与えられるが、その他は奴隷主のものになる。隷農（農奴）は一週間のうち3日は自分のために、3日は領主のために、1日は宗教（安息）のために。」と。この奴隷制社会・封建制社会のなかでは、支払い労働と不払い労働が明確に分かれていますという特徴があります。資本主義になり同じように支払い労働、不払い労働はあるものの、それが見えないため、労働者にとっての1日の全労働が支払労働であるかのように見えて

しまいます。このような違いがあるのです。マルクスはこの時代を超えた違いはあるものの、同じやり方に対して「わが自由主義者たちはこのタダで人を働かせるという不条理な考えに対する道徳的憤怒でいっばいになるだろう。」と述べています。

12時間働いて3シリングの賃金

司会…それでは9章の討論に移ります。労働力の価値については、これまで学習してきましたが、そこからより詳細な内容になります。皆さんからの質問をお願いします。

NY…レポートの中の①で、「労働力の価値または価格は、労働そのものの価格または価値たる外観をおびる、厳密に言えば、労働の価値または価格といふのは無意味な言葉なのだが。」とありますが、つまりどういう意味ですか。

柳本…この例で言うと、労働者が12時間働きました。12時間働いて3シリング賃金をもらいました。ところがこの12時間で作られた価値は実際には6シリングでした。ということでは労働者が受け取った3シリングは半分の6時間働いた分の価値であるということになります。しかしこの3シリングは労働者が12時間働いた後に後払いで支払われることから、労働者が12時間働いた対価のように3シリング支払われます。つまり「労働の価値」のように見えるのです。しかし実際は6時間で3シリングの価値を生み出しており、必要労働は6時間であり、残りの6時間は剰余労働であり搾取されているということです。マルクスが「労働の価値」と言ったその本質は「労働力の価値」であるということですから、そこをおさえておく必要があります。

KH…労働者側から見ると12時間働



解説する須藤行彦さん

いて3シリングの賃金を得たという事実だけで、3シリングが12時間分の労働の価値と思いきまされているのです。

MK：労働者側から考えた時に、資本家の思惑通り「労働の価値」という考え方をわざわざするべきではなくて、「労働力の価値」という視点でのみ考えるべきだという意味です。そうしないと剰余価値や搾取について理解ができなくなります。つまり労働の価値と言われたときには、労働者は労働力の

価値のことだと考えておけばよいということです。

須藤：これは単なる言葉の問題ではなく経済学上の最も重要な問題であると、『賃労働と資本』の序文のなかで「労働」と「労働力」の違いについて、エンゲルスが述べていますね。

資本家の取り分が剰余価値

NY：12時間働いて支払われた3シリングが労働の価値のすべてだと思わされているなかで、実際は半分しか支払われていないという剰余価値の説明をもう少しお願いします。

KH：人間労働は特殊であり、労働力は自分の生きていくための必要な価値以上の価値をつくり出すということですから、つまりそれが剰余価値です。その剰余価値があることで資本主義生産が成り立っているということです。資本家は労働者が生きていくために必要な

3シリングさえ支払っておけば、労働者がそれを超える価値を生み出すことを利用して儲けることができるということですよ。

柳本：資本家の取り分が剰余価値だということですよ。ここではあくまで例なので、6時間で3シリング、12時間で6シリングの価値などとなつていますが、実際は4対6であったり3対7だったりなど労資の力関係により様々です。ここではわかりやすく5対5にしています。

須藤：KHさんの言った「労働者の労働力商品は、自身の生きるための価値以上の価値を作り出す」ということは、労働者自身にはわかりません。一方資本家は、投入した総資本から利潤が生まれると考えています。総売り上げから労働賃金を含む必要経費を差し引いた残りの分が利潤として資本家の懐に入ります。実際には、労働者が新たに作り出した価値の一部を賃金で支払つ

◆特集 みんなの学習講座

てもあとの価値を自身の儲けとして
いるのです。ただ、この例の場合、労働者の生活に必要な額が3シリングであるとして、資本家が正当にその3シリングを労働者に賃金として返したとしても、搾取はあるということです。

わが自由主義者とは誰のことか

司会…次に進みます。レポーターから質問が出されています。

越智…P 80の2行目「わが自由主義者たち」とは誰のことでしょうか。

柳本…学者たちを使って封建制度に対する批判をした新興ブルジョアジーのことをさします。彼らは封建制度を否定・打倒し、資本主義社会に移りましたが、彼らブルジョアジーもまた資本主義社会で同じように労働者にタダ働きをやらせているではないか、とここでマルクスは皮肉を言っています。このタダ働きというのは、不払い労働に

よる剰余労働の部分をさします。

労働契約はあったのか

越智…P 80の7行目に「契約の存在」とありますが、この時代の労働契約はどのようなものだったのかかわれば教えていただきたい。

須藤…この時代には明確な契約書のようなものはありません。経済外的強制という言葉がありますが、封建時代には封建領主が農民に対してその力を持つて統治し、強制的に労働させていました。資本主義に入っても最初は対等な契約による労働ではありませんでした。産業革命以降は機械化により労働が単純化されたことよって、熟練労働者が駆逐され女性や子どもまでもが長時間労働をさせられることになりました。

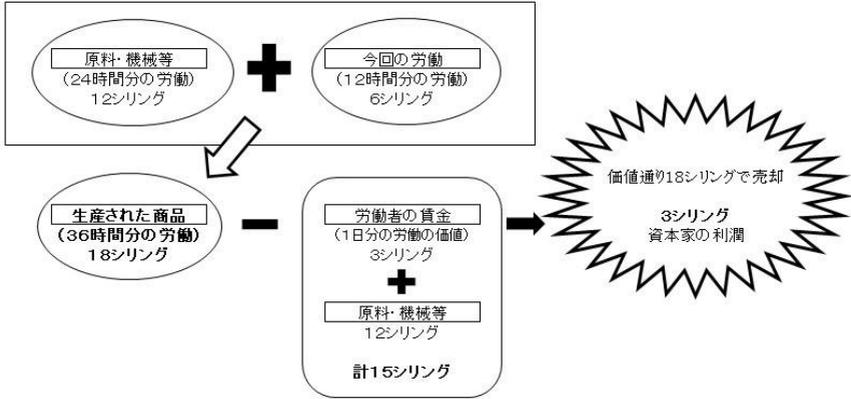
司会…9章はここまでとして、10章のレポートをお願いします。

第10章 利潤は商品を価値どおりに売ることによって得られる

労働力商品の特殊性

仮定として、「①12時間分の平均労働が6シリングに実現される。」②一日分の労働の価値または6時間分の労働の生産物は3シリングである。」とします。ある商品に費やされた原料・機械等に24時間分の平均労働が実現され、その価値は12シリングとします。そして今回労働者がこれらの生産手段に12時間分の労働を付加すると、合計で36時間分の実現された労働となり、総計18シリングとなります。ここから原料・機械分の12シリングと労働者に支払われる3シリングの賃金を差し引くと3シリングが残ります。つまり、生産により実現された18シリングの商品を決してそれ以上の価格で売ることなく、価値どおりに

●利潤は商品を価値どおりに売ることによって得られる



売ることによっても資本家は3シリングの利潤が得られるのです。

なぜそうなるのか。資本家は労働者に対して一日分の労働の価値3シリングを支払っています。そのうえで利潤が得られているのは、労働者の労働によってその一日分の価値以上の剰余価値を生産しているということであるのです。これが労働力商品の特殊性なのです。そのため、労働者に対しては価値どおりの賃金を支払うことによってもまだ利潤が生まれるということになるのです。これが搾取です。

価値通りの交換が前提

司会：図で説明すると理解が深まりますね。レポーターからこの章のポイントをお願いしますか。

越智：図の通りですが、重要なのは労働者の賃金を価値以下にすることもなく、また価値以上の価格で商品を

売らずとも、価値そのものの価格で商品売ることによっても資本家は利潤を受け取ることができるということです。

IU：一つ疑問なのですが、資本家はなぜ商品を価値以上に売らないのでしょうか。価値以上の価格で売ればたくさん儲けられると思うのですが。

TS：本来の価値より高く売ろうとしても、社会的平均の価格以上にはなかなか売れないですよ。

須藤：最初の1回、2回は騙してでも売れるかもしれませんが、偽った価格での販売は長くは続きません。また、売買したそれぞれで得した者と損した者が出ますが、総体で価値は変わらず、新たな価値を生み出さなため社会的には無意味なものになるのです。小さな単位で見ればそういう騙しあいの売買はあつたとしても、社会全体で平均的に見れば価値通りになります。社会的、経済的には価値通りの交換が前提

◆特集 みんなの学習講座

なのです。

剰余労働の搾取

YM: 価値というものを考える時に、現実の社会ではなかなか難しいですね。前回も自治体で働く労働者の賃問が出ました。私も郵政OBですが、今日どのくらいの価値を生んだとか全くわからないですよ。

柳本: もの作り労働であれば比較的わかりやすいのですが、公務労働では搾取についてや、どのくらいの価値を生んでいるのかもわかりづらいですね。公務員の場合は剰余価値を生産していると見るよりは、剰余労働で考えるべきと考えます。自身の再生産に必要な労働時間が例えば4時間で足りているなら、それ以上の時間が搾取されている剰余労働になるという具合です。そして搾取者は地方自治体であり国家です。

須藤: この章ではテキストの最初が「1時間分の平均労働が6ペンス・・・」というように時間を主軸に始まっているので、少しわかりづらいということはありません。結局のところ、資本家としては不変資本である原材料・機械等の12シリリングと、可変資本である労働者を雇うための3シリリング、合わせて15シリリングを準備しました。その生産手段を使つて結果18シリリングの商品を生み出したのです。そして余った3シリリングは資本家の儲けとなりましたね。この3シリリングはどこから出てきたのか。それは労働者の剰余労働によって生まれた剰余価値だということです。

本質を隠す、賃金後払い

須藤: 資本家は原料・機械等の12シリリングと労働者の賃金3シリリングの計15シリリングをあらかじめ準備して生

産に入りますが、実際は労働者への賃金支払いの後払いをします。このことが、いかにも労働者が働いたことに對する対価として賃金が支払われるというイメージをつくっているのです。スーパーに売っているリンゴは、それを食べる前にお金を支払わなくてはならないように、3シリリングを支払つて、労働者を雇つてから働かせるのが本来の形です。後払いは出来高払いのように、その本質を見えにくくし、労働者を搾取するための資本家の常套手段なのです。

司会: ...ここで理解しておくべきなのは、搾取の問題です。価値どおりに賃金を支払つて、価値どおりに商品を買えば、それだけでも利潤は生まれるのだというところですね。労働力の特殊性により、価値以上の価値をつくりだすということを押さえていくことが重要ですね。